

舌出し三番叟

長唄

全詞章

桜田治助 作詞

本名題「再春松種蒔」(またくるはるすずなのたねまき)

別題「志賀山三番叟」「種蒔

三番叟」

〔本調子〕 其の昔秀鶴の名にしあふ、志賀山風流の三番叟

似せ素もなかなかに、及ばぬ筆に写し絵も、いけぬ汀の石亀や、ほんに鵜の真似鳥飛び、とつぱ一重に有難き、花のお江戸の御贔屓を、頭に重き立烏帽子

さつばもおのが故郷へは、錦と着なすお取立て、烏漕がましくも五歳の、今日ぞ名残に候ふよ
あまの岩戸のナ、神楽月とて祝うほん、その年も

五つや七つ三つ見しよと、縫ひの模様の糸さまぎまに、竹に八千代の寿こめて

松の齢の幾千代も、変らぬ例鶴と亀、ひんと跳ねたる目出鯛に、海老も曲りし腰の七五三
宝尽しや宝船

やらやら目出度な

四海波風治まりて

常盤の枝ものほよへ葉も茂る

ゑいさら鯉の滝登り、牡丹に唐獅子、唐松を見事に見事に

さつても見事に手を尽し、仕立栄えあるよい子の小袖、着せて着連れて

参ろかの、肩車にぶん乗せて、乗せて参ろの氏神詣で

ぎねが鼓のでんつくでん、笛のひしきの音も冴えたりな

冴えた目元のしほらしき、なかなかの中娘をひたつ長者が、嫁に欲しいと望まれて

藤内次郎が橡栗毛に乗つて、えいえいえい、ゑつちらおつちら渡せられたので、其の意にまかせ申した

初婚礼の吉日は、縁をさたんの日を撰み、送る荷物は

何々やろな、瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笥、玉をのべたる長持に、数もちやうどの潔よさ

さまはナア百までナア、わしや九十九までナア

俱に白髪のア、生ゆるまでナア

嫁とは言へど世間見ず、駕籠の内外の思惑が、恥かしみじみ案じられ、袖に添寝の新枕、交す言葉も

何と言うて

如何した宵の口の、口女男の銚子の盃も、飲まぬ内から殿御に飲まれ、耳より先へ染めて濃き、顔も

紅葉の色直し

それから床に差し向かひ、怖き半分嬉しさも、先へは出ず後退り

互に手さへ鳥鐘の、声が取持ちやうやうと、明け行く空を月にして

妹背結んで女夫中、睦まし月と岩田帯

聴て孫曾孫玄孫をもうけ、末の楽しみ此の上や

あらよろこばしせうが身と、心うき立つ踊歌

花が咲き候ふ、黄金の花が、てんこちない、今を盛りと咲き匂ふ、てもさつても見事な黄金花

欲しかおましよぞ、一枝折りて、そりや誰に、いとし女郎衆のかぎしの花に、ほうやれ恋の世の中

実に恋の世の中、面白や

すぐにも帰りお目見得を、またこそ願ふ種蒔きや

千秋万歳、万々歳までも、賑はふ芝居と舞納む